

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02196

研究課題名（和文）紀元前5世紀ギリシアにおける哲学倫理思想の総合的解明 - ソフィスト思想とその影響 -

研究課題名（英文）Philosophical and Ethical Thought in 5th Century Greece

研究代表者

中澤 務 (NAKAZAWA, Tsutomu)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：10241283

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古代ギリシア文明の黄金期である紀元前5世紀における哲学・倫理思想の総合的解明をおこなった。この時代には、ソフィストと呼ばれる思想家たちが多数登場し活躍した。これまで、彼らは否定的な評価をされることが多かったが、本研究では、彼らの思想を再検討し、彼らが知的伝統のなかで新しい哲学倫理思想を構築していった思想家たちであり、彼らを中心とした論争を通して、さまざまな新しい世界観と価値観が普及していったことを、その思想の具体的な解明を通して明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

紀元前5世紀ギリシアの哲学倫理思想の全体像は未解明な部分が多く、とりわけ、わが国では研究の蓄積が少ない。本研究の研究成果は、わが国だけでなく、世界的なレベルにおいて、ギリシア哲学史をめぐる新たな知見を提示し、当該分野の研究を進歩させる学術的意義を持つ。また、本研究は、古代ギリシア文明の歴史的意義をめぐる新たな知見を提示するものであり、これまでの歴史的認識とは異なる新しい歴史的視点を与えるという社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In this research I investigated comprehensively the philosophical and ethical thoughts in Ancient Greece in 5th Century B.C. In this era, many thinkers called 'Sophists' acted in Greek world. They have been evaluated negatively. I re-examined their particular thoughts in detail. As a result, I made clear that they were the thinkers who created new philosophical and ethical thoughts and that through their disputes they disseminated a new world view.

研究分野：古代ギリシア哲学

キーワード：ソフィスト 古代ギリシア 紀元前5世紀 自然哲学 弁論術 相対主義 ノモスとピュシス

1. 研究開始当初の背景

古代ギリシア文明は、紀元前5世紀において黄金期を迎え、アテナイの繁栄のもとで、文学・歴史などさまざまな古典作品を輩出した。この時期のギリシア文化は、欧米の研究において盛んに研究されており、現在においても西洋古典研究の中心的研究課題となっている。しかし、哲学・倫理学の対象となる思想的状況については、この時代の状況の解明は、いまだ十分になされていない状況にある。

このような事態が生じている背景には、ソクラテス・プラトン・アリストテレスという流れを哲学思想の本流とみる伝統的な哲学史理解が存在している。伝統的な哲学史理解では、紀元前5世紀は、それ以前の時代から継続する自然哲学の流れと、ソクラテスによって作り出された新しい哲学の流れの転換点とみなされている。すなわち、この世紀は、紀元前7世紀ころより開始された自然哲学が、紀元前6世紀におけるエレア派の登場によって大きな転機を迎え、アナクサゴラス、エンペドクレス、原子論などの新しい自然哲学が登場した時代であるが、他方、こうした自然哲学の流れが次第に収束していき、ソクラテスによって新たにはじめられた倫理的な探求へと転換していった時代と捉えられているのである。一般的には、このソクラテスの登場によって、その後、紀元前4世紀以降に展開されていくプラトン、アリストテレス以降の哲学の流れが生まれたと考えられている。

このようにみると、紀元前5世紀の思想は、旧来の哲学と新しい哲学の断絶のなかにあると理解されることになるが、この時期の思想界の実際の姿は、そのような理解とは大きく異なっている。ソクラテスは、この時代に登場した新しい時代の思想家のひとりであり、ソクラテスを含む多様な思想家たちの論争を通して、この時代に新しい世界観が生まれ、それが紀元前4世紀以降の哲学に引き継がれていったと考えるのが自然なのである。

このような歴史理解が採用されてこなかった理由は、その後形成されていった、この時代の哲学史をめぐる説明図式にあると考えられる。この説明図式のはじまりは、プラトンにある。プラトンは、この時代の論争の中心にあったソフィストたちの思想を、ソクラテスの哲学の対極に位置づけ、似非哲学として厳しく批判した。これによって、ソフィストたちの思想は、哲学史の傍流に押しやられ、過小評価されるようになった。このような歴史理解の図式に立てば、紀元前5世紀とは、ソフィストという似非哲学者たちが、誤った思想と倫理を普及させていった時代であり、その流れは、やがてソクラテスの登場によって、正しい方向に修正されたことになる。このような歴史理解は、アリストテレスに引き継がれ、ヘレニズム期には、すでに標準的な哲学史理解となり、現代まで引き継がれていくことになる。こうして、ソフィストたちを中心とする紀元前5世紀の哲学・倫理思想をめぐる研究は、ほかの時期の研究と比較すると、マイナーな分野となったのである。

しかし、ソフィストたちは、紀元前5世紀の中心にあった思想家たちであり、この時代の政治や文化の形成に多大な影響を与えていたと考えるほうが合理的である。たとえば、以下のような影響を指摘することができる。

(1)ソフィストたちは、一般的に考えられているような実利的な思想家ではない。ソフィストたちは、この時代に起こっていた自然哲学の論争、すなわち、エレア派の形而上学的存在論と、エンペドクレス、アナクサゴラスらの間の論争に回答していくなかで、独自の経験主義的理論を作り出していった。そのような新しい哲学的世界観は、哲学ばかりでなく、政治、文学、芸術など、この時代の多様な分野の思想家たちに影響を与え、紀元前5世紀の思想形成に大きな影響を与えた。

(2)この時代にソフィストたちが普及させていった論争の技術(弁論術)は、言葉(ロゴス)を哲学の中心に押し上げていった。これによって、プロタゴラスやゴルギアスの思想に代表される、言語と世界をめぐる新しい世界観が構築された。

(3)この時代に強く意識されるようになった文化の相対性をめぐる問題は、いわゆる「ノモスとピュシス」をめぐる問題に発展した。共同体の倫理は、恣意的な取り決めか、あるいは自然的基礎を持つのかというソフィストたちの論争は、社会の形成や、倫理の成り立ちをめぐる新しい思考を生み出していった。

こうしたソフィストたちの意義の再評価の動きは、欧米では19世紀には生じており、20世紀になると歴史理解の見直しが本格的に始められるようになった。それ以降、紀元前5世紀の思想の姿をめぐる新しい研究が次々に発表され、そのなかで、ソフィストたちの思想の意義が再評価されている。

これに対して、わが国においては、この問題は十分に認識されているとはいいがたく、とりわけ、ソフィストの思想をめぐる研究はきわめて少ない状況である。本研究は、わが国での研究状況の現状を踏まえ、欧米での新しい研究成果を踏まえつつ、紀元前5世紀の哲学・倫理学での思想状況の全体像を、ソフィストたちの思想の総合的解明という課題を通して、あきらかにするために構築されたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「1. 研究開始当初の背景」で説明したわが国での研究状況に対して、欧米での研究状況を踏まえつつ、ソフィストたちの思想を総合的に解明し、それを通して、紀元前5世紀の哲学倫理思想の全体像を明らかにし、その歴史的意義を考察するところにある。そのために、1.において指摘した(1)(2)(3)の特徴のそれぞれに沿いながら、個々の哲学者やソフィストたちを個別に取り上げ、その断片群に対する詳細な分析をおこない、個々の思想内容と、相互の影響関係を具体的にあきらかにしていくことを目指した。本研究が目指した具体的な解明目標は、以下の通りである。

(1) 紀元前5世紀の自然哲学の影響の解明

上述のように、紀元前5世紀は、紀元前7世紀ころに登場した自然哲学が、紀元前6世紀に転換を迎え、その流れの中で、複数の新しい理論が登場し、理論的に大きく発展していた時代である。このような流れのなかで、紀元前5世紀初頭から、ペルシア戦争をきっかけとしたアテナイの台頭とそれともなう社会的・文化的発展が開始され、ソフィストたちが登場して、新しい思想が普及していった。このような状況を背景に、紀元前5世紀における自然哲学と、それ以外の思想の流れとの影響関係を解明することが第一の目標である。

(2) 言語と世界をめぐる認識論的思想の解明

紀元前5世紀のソフィストたちの思想を代表するのが、言語(ロゴス)をめぐるさまざまな考察である。プロタゴラスは新しいロゴスのありかたを模索し、ゴルギアスは、弁論術という新しい技術を開発して、教育した。こうしたロゴスの重視は、ほかのすべてのソフィストたちに共通にみられる思想的特徴であり、たんなる実践的な言論技術だけでなく、たとえば、「名前の正しさ」をめぐる論争など、哲学的にも重要な意味を持っている。また、言語はつねに世界の認識の問題と密接に関連しており、言語への関心は、プロタゴラスのいわゆる「人間尺度説」に代表されるような新しい世界認識の理論を作り出した。こうした紀元前5世紀における言語と世界をめぐる認識論的思想を総合的に解明することが、第二の目標となる。

(3) 共同体と倫理をめぐる思想の解明

言語をめぐる思想と並んで、ソフィストたちの思想の中心をなすのが、倫理的思想である。紀元前5世紀という啓蒙と合理主義の普及の時代において、旧来の伝統的倫理への懐疑と、新しい合理的な倫理の模索がはじめられた。ソフィストたちはこのような時代背景のなかで、人間と社会をめぐる新しい倫理的枠組を模索した。なかでも、いわゆる「ノモスとピュシスのアンチテーゼ」をめぐる新しい問題図式が登場し、ソフィストたちはこの図式のなかで、社会における倫理・法律・習慣(ノモス)と人間の自然的本性(ピュシス)の関係性を、多角的な視点から考察し、新しい倫理的枠組の模索をおこなった。第三の目標は、このようなソフィストたちの新しい倫理的考察の具体的な姿を解明し、その意義を明らかにすることである。

以上のような三つの課題のもとに、ソフィストたちの思想を総合的に解明し、紀元前5世紀の哲学・倫理学の歴史的理解に対して新しい光を投げかけることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、上記の(1)(2)(3)の目標に沿うかたちで、それぞれのソフィストたちの思想を具体的に解明していくという手法でおこなわれた。研究にあたっては、紀元前5世紀の思想家たちを網羅的に取り上げたが、分析の中心となるのはソフィストたちの思想をめぐる資料である。本研究では、主たる分析対象として、以下を設定した。

プロタゴラス、 ゴルギアス、 ソフィストのアンティフォン
プロディコス、 ヒッピアス、 トラシュマコス

なお、これ以外の資料として、ソフィストの思想と密接な関連を持つ以下の資料を対象としている。

紀元前5世紀の失われた演劇作品(作者不詳)の引用(『シシュフォス』断片)
イアンプリコスの著作に引用された作者不明のソフィスト文献
『両論(ディッソイ・ロゴイ)』という題名で伝えられているソフィスト文献

研究は、四つのフェーズを設定し、これらの素材を用いて、以下のとおり段階的に実施した。

(1) 基礎的研究1: 紀元前5世紀の自然哲学(2017-2018年度)

このフェーズでは、紀元前5世紀の哲学的論争の基盤をなす自然理解の実態を考察し、そこで論争の姿を解明して、当時の哲学的論争の全体像を考察した。

(2) 基礎的研究 2 : 言語と世界をめぐる認識論 (2018-2019 年度)

このフェーズでは、紀元前 5 世紀における言語 (ロゴス) と世界をめぐる問題を、ロゴスをめぐるソフィストたちのさまざまな思想の具体的検討を通して考察した。

(3) 基礎的研究 3 : 共同体論と倫理想

このフェーズでは、紀元前 5 世紀における共同体と倫理想の全体像を、ソフィストたちの議論を、ノモスとピュシスのアンチテーゼや共同体の理論の検討を通して明らかにした。

(4) 総合的研究 : 紀元前 5 世紀の哲学・倫理想の全体像

(1) ~ (3) によって明らかとされる紀元前 5 世紀の哲学・倫理想の全体像を踏まえ、新しい知見がギリシア哲学史全体に対してもたらす意義を考察した。

4 . 研究成果

上記 (1) ~ (3) における研究成果の概要は以下の通りである。

(1) 紀元前 5 世紀の自然理解の解明

この時代における自然哲学の議論は、ソフィストたちの考察と多面的に関係しており、ソフィストたちが、当時の哲学的文脈のなかにある思想家であることが明らかとなった。たとえば、プロタゴラスにおける人間尺度説が、当時の自然哲学における自然理解と認識理論と密接に関係していること、ゴルギアスのロゴスの理解が、当時のエレア派の言語観との論争のなかから生まれたものであることなどが具体的に解明された。

(2) 言語と世界をめぐる認識論

ここでは、言語と世界の認識をめぐるソフィストたちの思想の多様性と豊かさを具体的に解明することができた。たとえば、プロタゴラスのロゴスをめぐる理論は、従来考えられていたような詭弁の技術などではなく、政治的論争の文脈の中で発揮される実践的な論争の技術であったこと、また、人間尺度説の思想は、そうした実践的思想を背景にして提示されたものであることが明らかにされた。また、ゴルギアスの弁論術は、たんなる実践的技術ではなく、その背後には、言葉をめぐるゴルギアス独特の理解が含まれており、それは、この時代に新たに登場した弁論術的なロゴス理解として位置づけられること、プロディコスには独創的な言語と認識の理論が存在していること、従来、才能の乏しいディレタントとみられていたヒッピアスには、プラトンのイデア論の理論に対抗するような言語と認識の理論が存在していることなど、これまで発見されていなかったソフィストたちの新しい理論の存在を確認することができた。

(3) 共同体論と倫理想

ここでは、共同体と倫理想をめぐるソフィストたち独自の理論的枠組の存在を具体的に解明することができた。具体的には、プロタゴラスには、共同体の存立とそこでの徳の教育をめぐる独自の理論が存在し、それは、これまで知られていた当時の理論的枠組とは異なる発想で形成されていることが明らかにされた。ノモスとピュシスのアンチテーゼをめぐる問題は、従来は、人間生活においてノモスとピュシスのいずれが重要かという二者択一的な問題として理解され、ソフィストたちの多くは、社会的倫理 (ノモス) の価値を否定し、欲望の追求という人間本性 (ピュシス) を肯定したのだと考えられてきたが、このような理解図式そのものが誤りであることが明らかにされた。具体的には、ソフィストのアンティフォンの断片の解明から、ソフィストにおけるノモスとピュシスとは、社会生活において人間の行動を規制する重要な二つの要素であり、これらふたつの調和しない要素をいかに調和させていくかということが、彼の倫理的課題であったことが明らかになった。そして、こうしたノモスとピュシスに対する態度は、アンティフォンだけでなく、すべてのソフィストに共通の倫理的枠組であったことが、プロディコスやトラシユマコス、イアンプリコスの資料の分析等から明らかとなった。

以上のような具体的研究成果は、研究開始当初の予想に沿うものであったが、当初予想された以上に、紀元前 5 世紀の思想状況の多様性と豊かさが具体的に明らかにされる結果となった。

「 1 . 研究開始当初の背景」に記したとおり、本研究は、わが国における研究状況において不足している部分を補い、紀元前 5 世紀におけるソフィスト思想の意義を明確にして、わが国における哲学史理解をめぐる認識を刷新するために企図されたものであるが、結果として、当該テーマをめぐる欧米での総合的研究に匹敵する多くの研究成果を得ることができた。本研究は、欧米での先端的研究成果に基づくものであるが、それを乗り越える新しい知見も多数獲得しており、その意味では、当初の目的を超える成果を得られたと評価することも可能であろう。本研究で明らかにされた新しい知見は、従来のギリシア哲学史理解を覆す力を持ち、学術的インパクトは大きいと思われる。

他方、本研究の研究期間内では十分に解明しきれなかった問題があることも事実である。本研

究では、個々のソフィストたちの具体的な資料分析を中心に展開したため、ソフィストたちの思想の総合的解明については十分な成果が得られたが、自然哲学との間の影響関係については、いまだ解明が不十分なところもある。さらに、本研究では、紀元前5世紀におけるほかの知的文脈、たとえば、この時期に登場した歴史学的視点のなかにあるヘロドトスやトゥーキューディデースの思想との影響関係、あるいは、医学思想（ヒポクラテス学派）との思想的関係性、悲劇をはじめとする文学における思想との影響関係については、その考察が十分になされたとはいえない。今後は、このような多様な流れの解明も含め、紀元前5世紀の哲学倫理思想の総合的解明をさらに進めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中澤務	4. 巻 70
2. 論文標題 「シシュフォス断片」研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学 文学論集	6. 最初と最後の頁 79-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤務	4. 巻 69-1
2. 論文標題 トラシュマコスと正義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西大学『文学論集』	6. 最初と最後の頁 51-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤務	4. 巻 1
2. 論文標題 古代ギリシャの真理概念 その歴史の変遷をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『井上克人教授退職記念論文集』	6. 最初と最後の頁 57-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中澤務	4. 巻 68-2
2. 論文標題 アノニウムス・イアンブリキ研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西大学文学論集	6. 最初と最後の頁 57-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中澤務	4. 巻 67-3
2. 論文標題 ソフィスト・プロディコス <small>の</small> 宗教思想	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西大学文学論集	6. 最初と最後の頁 95-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中澤務	4. 巻 71-4
2. 論文標題 ヒッピアスの美と存在の理論 - 『ヒッピアス (大)』研究 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西大学文学論集	6. 最初と最後の頁 109-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------